写真 ワークショップ
Photography Workshop

出題：2018年8月11日（日）
提出：2018年8月26日（日）
出題担当：江幡

『わたしたちは、ふしぎな水の中にいるようなものだ。病的なことが健康的だったり、束縛もしくは解放が歓びだったり、酔って認識状態が現実だったり、普通だと思っていることが、まったく反対だったりするのだ』
オリバー・サックス

“We are in strange waters here, where all the usual considerations may be reversed – where illness may be wellness, and normality illness, where excitement may be either bondage or release, and where reality may like inebriety, not sobriety.” Oliver Sacks

課題 Contents

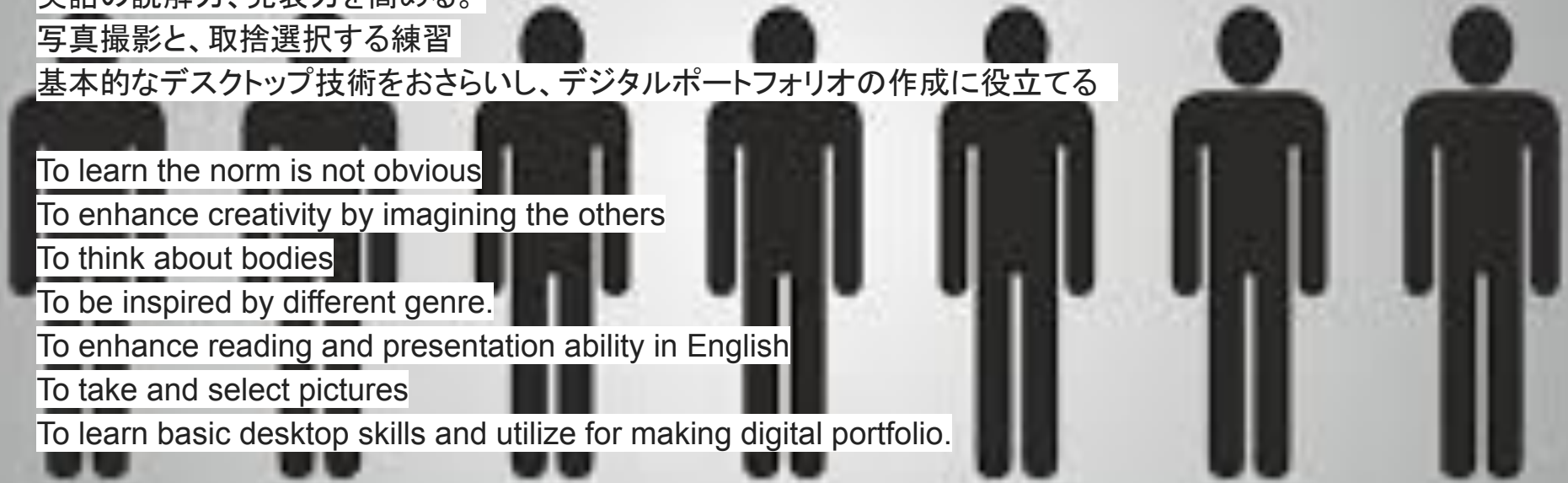
イギリスの神経学者オリバー・サックスが神経の病と闘う患者を描いた話『妻を帽子とまちがえた男』（1985年）を題材に、ストーリーに出てくるP博士の物体の認識方法をヒントに写真撮影をし、プリントの上リーフレットにして発表。

By reading a quotation from “The Man Who Mistook His Wife for a Hat” 1985 by a British neurologist, Oliver Sacks, get inspiration by the way of seeing of Dr.P, take pictures and print out for presentation.

ワークショップの目的 Objectivity

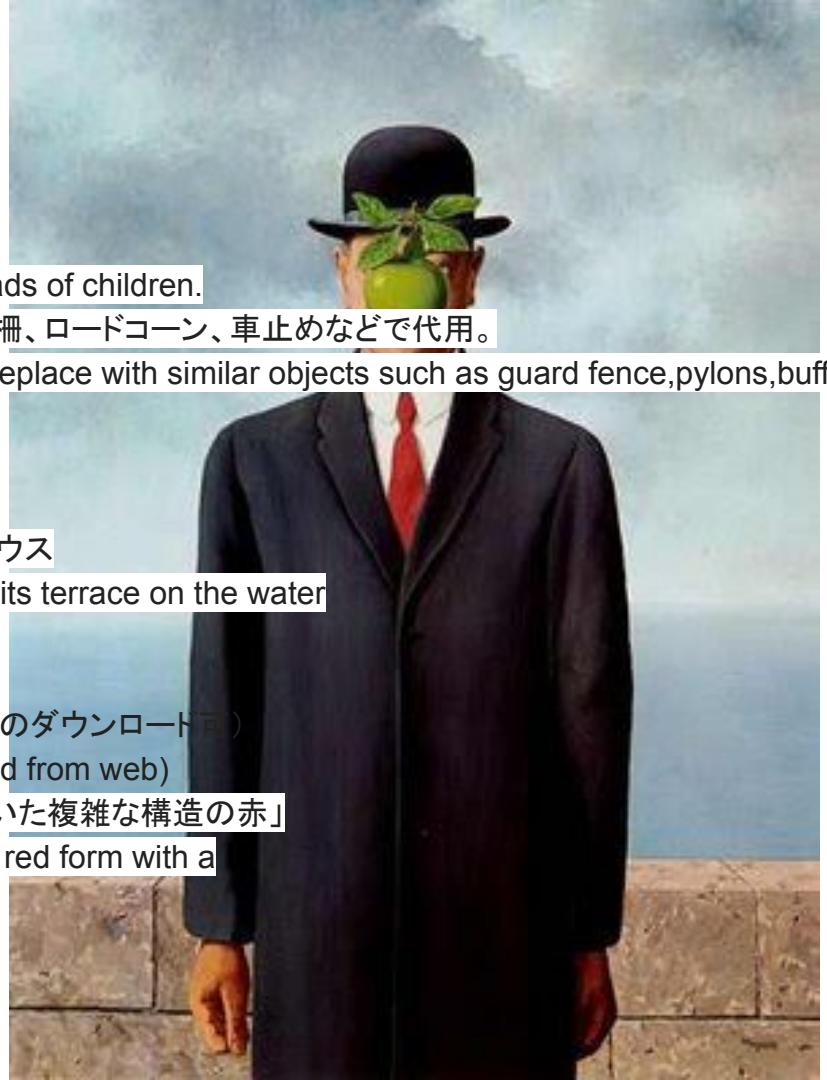
「普通」は自明でないことを学ぶ。
他者を想像することにより、創造性を高める。
身体について考える
別の分野からインスピレーションを受け作品に生かす。
英語の読解力、発表力を高める。
写真撮影と、取捨選択する練習
基本的なデスクトップ技術をおさらいし、デジタルポートフォリオの作成に役立てる

To learn the norm is not obvious
To enhance creativity by imagining the others
To think about bodies
To be inspired by different genre.
To enhance reading and presentation ability in English
To take and select pictures
To learn basic desktop skills and utilize for making digital portfolio.

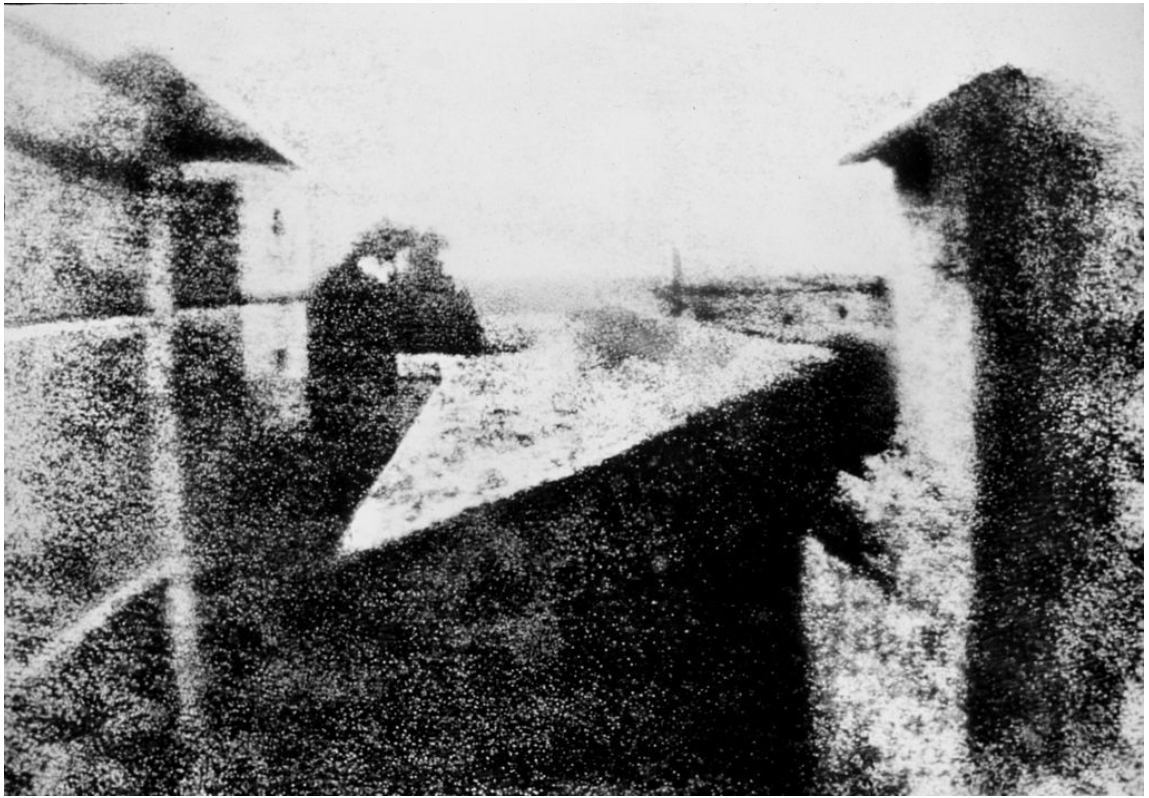


P博士が間違えた物体 Objects mistook by Dr. P

1. 消火栓や駐車メーターの先端⇔ 子供の頭
   Heads of water-hydrants and parking-meters ⇔ the heads of children.
   *最近は消火栓が地上に出ているものが少ないので、防護柵、ロードコーン、車止めなどで代用。
   There are no water-hydrants these days on ground→ Replace with similar objects such as guard fence,pylons,buffer stops
2. 足 ⇔ 靴
   Foot ⇔ shoe
3. サハラ砂漠 ⇔ 川と水上にテラスをのばした小さなゲストハウス
   Sahara dunes ⇔ a river, and a little guest-house with its terrace on the water
4. 奥さんの頭 ⇔ 帽子
   His wife's head ⇔ hat
5. アインシュタイン（顔に特徴がある有名人。ウェブサイトからのダウンロード可）
   Einstein (people with clear identity; could be downloaded from web)
6. 赤いバラ ⇔ 「6インチ位の長さの」「緑の棒状のものがついた複雑な構造の赤」
   Red rose ⇔ 'About six inches in length,' 'A convoluted red form with a linear green attachment.'
7. 手袋 ⇔ 何かものを入れるもの？
   Glove ⇔ a container of some sort?'

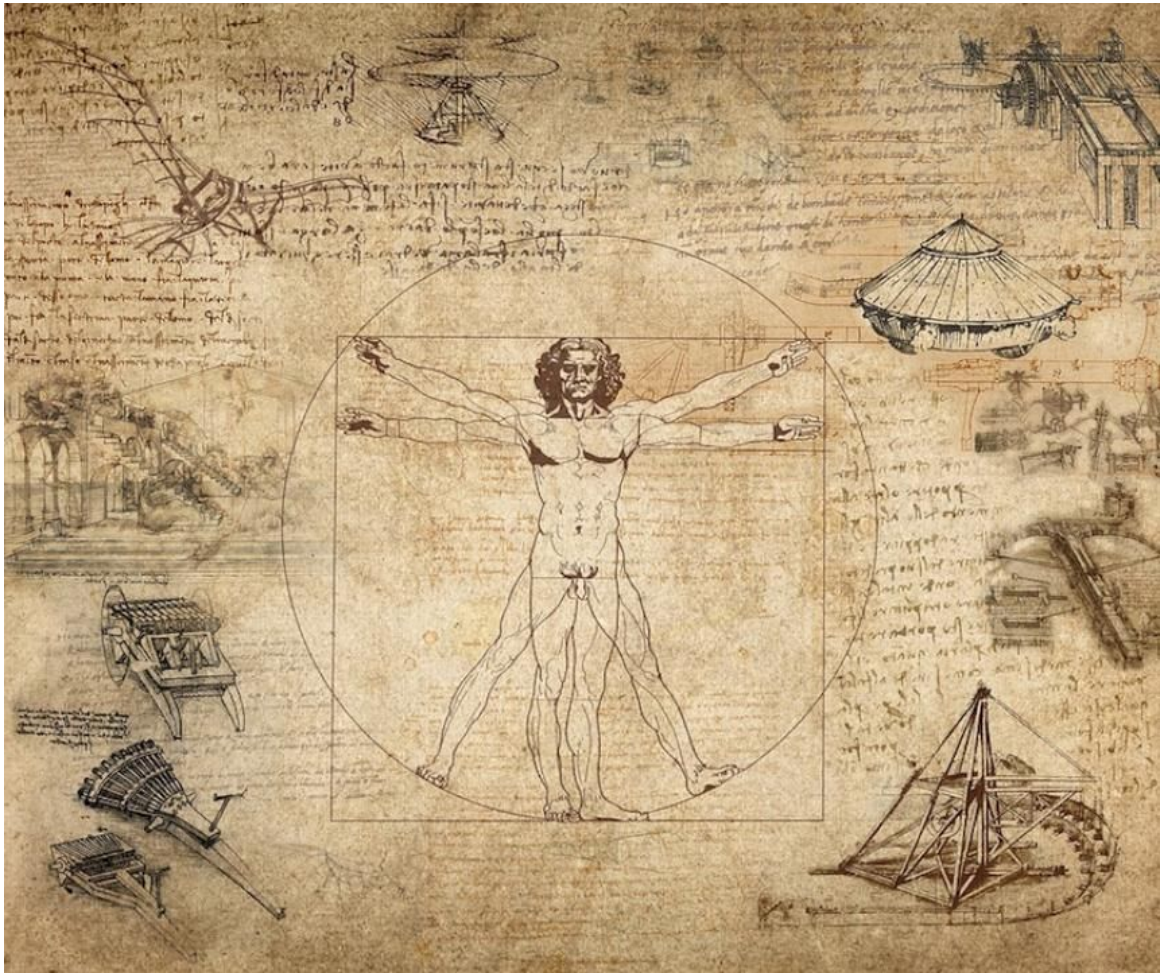


<Painting and Photography>



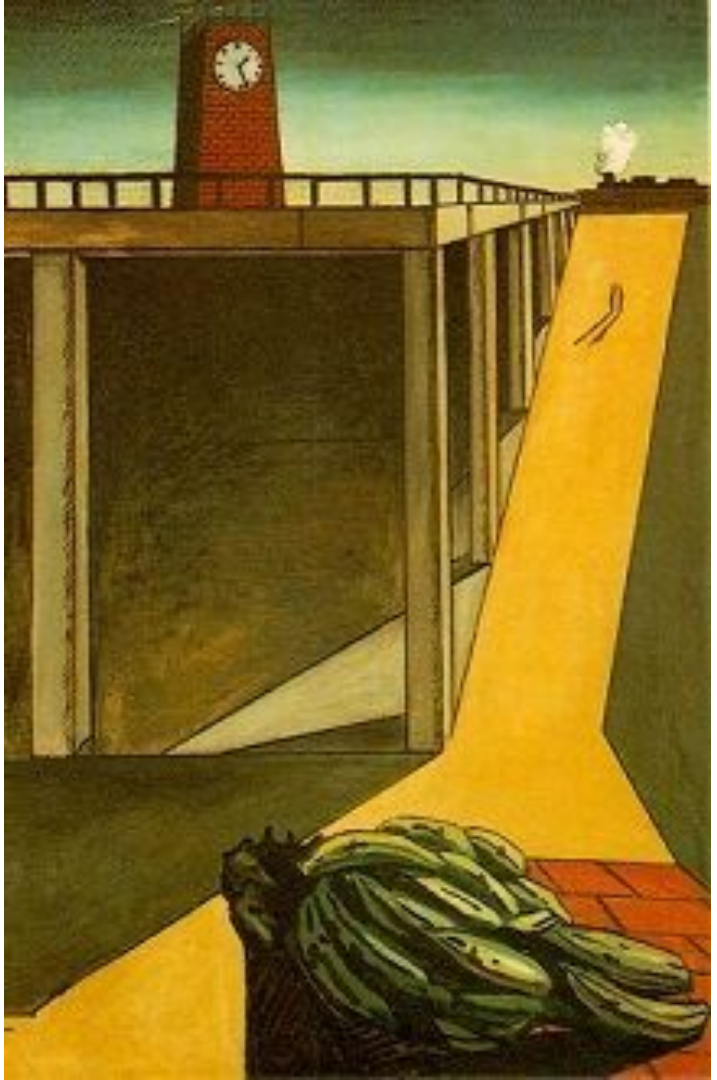
Retouched version of the earliest surviving camera photograph, 1826 or 1827, known as View from the Window at Le Gras

<Art and Science>



レオナルド・ダビンチ

<Surrealism and Psychiatry>



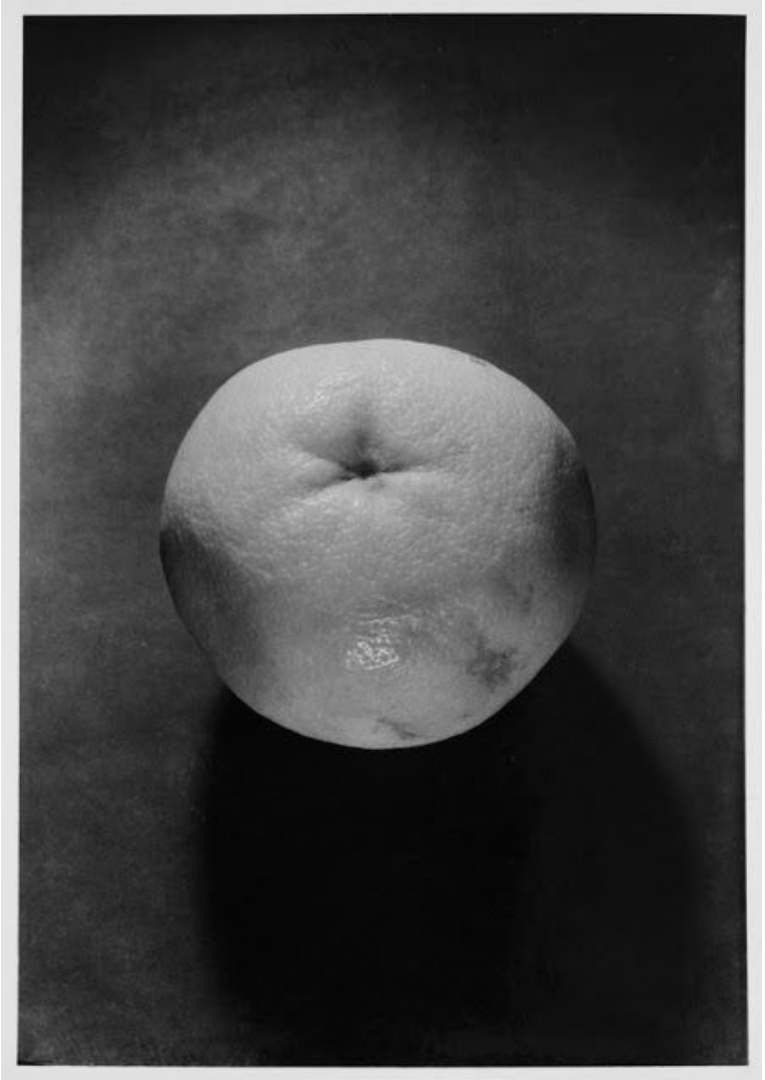
Giorgio de Chirico

<Dada and Surrealism>

Indestructible Object (or Object to Be Destroyed)
Man Ray 1964.

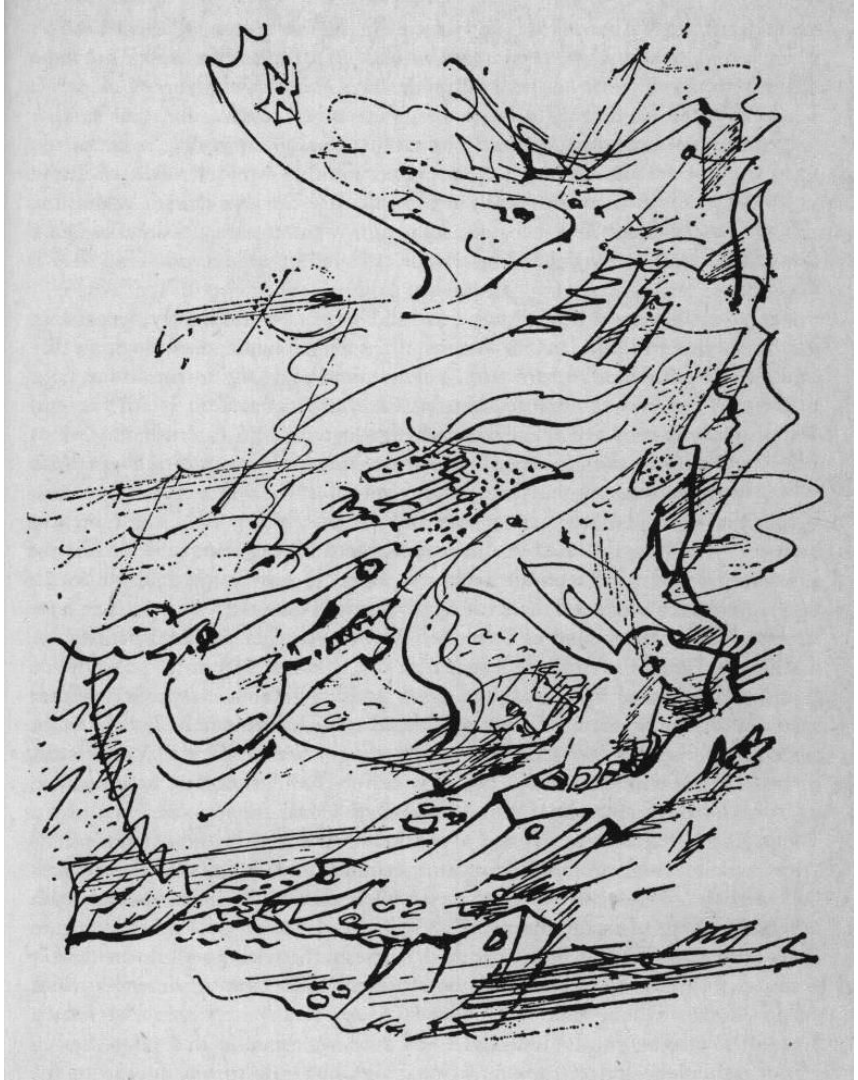
Plate from La Poupée
Hans Bellmer
(German, 1902–1975)
1936. Gelat

ジャック アンドレ ボワファール「Big Toe, masculine subject, thirty years old , Documents, No6」(1929年)



Wols (1913-1951)
Untitled [Still Life – Grapefruit] 1938

<Automatism/
Abstract Expressionism/
Pop Art>



André Masson. Automatic Drawing. (1924)

<Surrealism in Japan>

瑛九《バレリーナ》1950年頃

岡上淑子
《招待》
1955年
紙、コラージュ

＜Contemporary＞

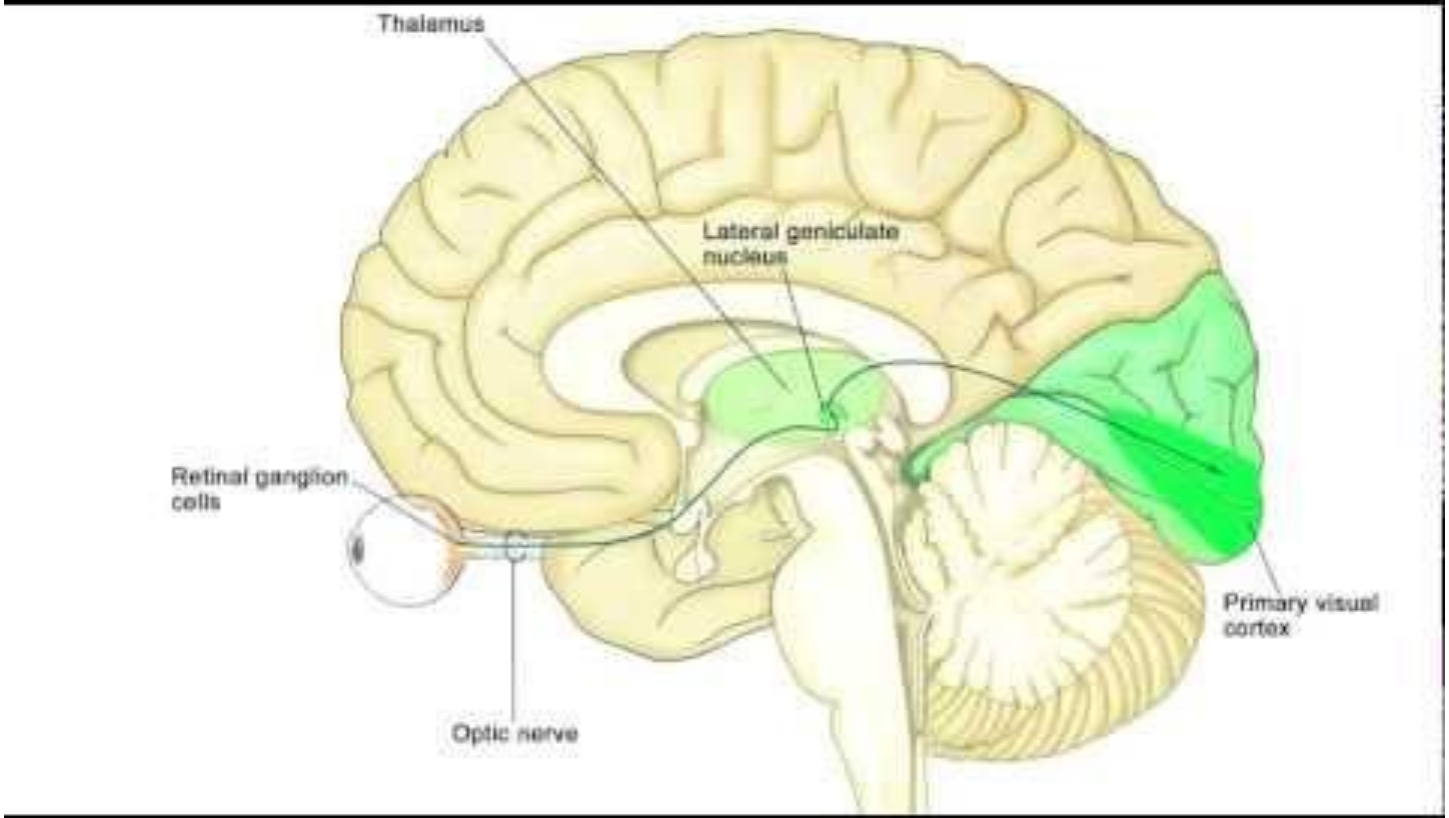
Tamura Yuichiro Milky Bay (2016)

アピチャッポン・ウィーラセタク

rika noguchi

Inka Essenhigh
Snowflake, 2009
Victoria Miro
Contact gallery

Glenn Brown
Deep Throat, 2007
Gagosian


Thalamus
Lateral geniculate nucleus
Retinal ganglion cells
Primary visual cortex
Optic nerve

<Hiroo Yamagata>

…千利休は、それまでだれも美しいと思われていなかったとと屋の茶碗に美を見いだした。それは現代アートの多くとは話がちがう。「渋い！」という感覚はかなり多くの人に共有されているし、ほとんどの人はそれを本物の美として認識している。

人によって見解はちがうだろうけれど、ぼくはキリスト像をおしっこに浸した代物をほめている人は、別にそれが美しいからじゃないと思う。「いろんなものに浸してみましたが、おしっこが一番光の具合がいいんですよ」という話じゃないだろう。単に、奇矯なことをしてやろう、人のいやがることをしようという低級な喜びでしかないと思う。他と差別化するための知的資本、という意味合いさえないんじゃないか。

でも渋さとか、侘び錆び概念はちがうようだ。 あるいはいまのロックでもいい。人々はロックを本当にいいと思ってきいている。そしてそれは別に何のファッションでもない。変な前衛アーティストをほめて見せるのは、知的スノビズムを満足させるかもしれないけれど、いまナイン・インチ・ネイルズが好きだと言ったところで別に何の箔もつかない。昔は親への反抗でロックを～、なんてのがあったかもしれない。親がいやがるからわざと騒々しいプレスリーを聴いてやるぜ、というような。

けれど、いまはそんなのもない。でも、みんな本当にいいと思ってロックを聴いている。それまでとまったくちがった美の概念ができて、それが定着している。なぜ急にそういう変化が起きたんだろう？

ノイズ音楽をきくと生殖器官が振動して子孫を残しやすくなるために、あるとき一瞬で遺伝的にそういうものを美しいと思う遺伝子ができあがったのか？　そんなことあるわけがない。もしそれが遺伝的なものだとしたら、それは昔からあったものだ。

でも、なぜそんな遺伝的な回路があるんだろう？　… そこにこそ芸術の価値があるとぼくは思っている。ノイズまみれのロックに人が反応するのはなぜか？　むしろ認知科学こそそういうメカニズムを研究すべきだ。パトリシア・ピッチニーニの無意味な流線型すべすべにぼくたちはなぜ反応するのか？

それは認知科学に導かれるものじゃなくて、逆にそれを導くものだ。本当にすぐれた芸術やアートというのは、むしろこれまで科学の知らなかった人々の感覚や情動を掘り出してくれるものだ。ぼくが考えているアートや芸術の価値は、新しい情動を掘り起こすのがその意義だ。

もちろん、それはずっとむずかしい。わかっている感覚反応をなぞるのは簡単だけれど、でもわかっていない新しい情動のツボを見つけるのはずっとむずかしい。

でも、それを（ごくたまにとはいえ）成功させるからこそ、芸術やアートは社会においてそれなりの価値を認められている、とぼくは思っている。逆に、いったん見つかった感覚回路なんて、最終的には電極さしこんで刺激しとけばいいんじゃないか、とさえ思うのだ。

山形浩生　https://cruel.org/diatxt/diatxt6.html